柏葉タイム「総合的な探究の時間」の取り組みについて

令和６年度３学年主任　波塚 彰優

Ⅰ はじめに

新課程最初の学年である令和４年度入学生の、３年間の取り組みを振り返る。まず、１年次に探究の時間をデザインする際に留意したポイントが、３つある。

１）探究の時間に学んだことや身に付けたことが、生徒の進路決定の際に武器になるように意識すること。
２）３年間の積み重ねで完成するストーリーを描くこと。
３）担当する教員が苦しまない、持続可能な授業展開であること。

これらのポイントは、これまでの勤務校における実践を通じて学んだことであり、本校生徒の進路の実情を考えるとかなり重要な要素である。また、学校内の資源や活動だけでは限界があることから、外部のリソースをいかに取り込むかが鍵であると感じていたことが背景にある。

Ⅱ １年次の取り組み

１年次の前半は、立山町の企業訪問など、既存のプログラムに合わせた学習を進めた。２学期に入ると、すぐに「個人探究」を開始した。これは、自分の好きなテーマを設定して、それについて探究をするというものであるが、以下の工夫を取り入れた。

・「探究とは何か？」というレクチャーを行い、インターネットを使って調べるだけの学習から脱却するように進めた。
・大学、専門学校から講師を招き、課題設定・中間報告・最終発表で、それぞれ個別に指導を受けた。
・毎回の授業終了時に、次回の探究計画（次回までに進めておくこと）を記して、探究の「見える化」を図った。
・アウトプットの重要性を意識するために、最終的なまとめはプレゼンテーションソフトを使って発表する形式をとった。そのために、ソフトの使い方講座を実施した。

（実践事例）

9/27　個人探究オリエンテーション・・・テーマ設定、仮説を立てよう、探究の進め方
10/25　系統分野別ガイダンス・・・・・・外部講師からアドバイスをもらう
12 /6　Google スライド入力・・・・・・・パワーポイント制作の前段階として
12/13　スライドを用いた中間発表会・・・グループを作って全員が報告する形式
2/ 7～ＰＰ講座・・・・・・・・・・・・・クラスごとにスライド制作のコツをレクチャー
3/15　最終発表会・・・・・・・・・・・・代表者による発表、外部講師を招いて

（実践を通じて）

・テーマを決めて、それに対する仮説を立てて検証することにより、インターネットで調べたことをまとめるという作業から脱却する生徒が多く見られた。

・パワーポイントのスライド作りにおいて、講座で学んだことをもとに、取り上げる情報の取捨選択を図るとともに、見出しやアニメーションなどの工夫を取り入れる生徒が多かった。

・１年次に取り上げたテーマが、そのまま３年次の進路選択に繋がった生徒も多く、そうした生徒ほど、進路先に対する志望の理由が明確であった傾向がみられる。

＜最終発表会　発表テーマ一覧＞

「授業中、眠くなるのはなぜか」

「牛肉を一番美味しく焼くためには」

「デザインと購買意欲の関係性」

「ユマニチュードと患者の心の変化」

「肌質と美容成分」

「教師はどうあるべきか」

「謎の体調不良を改善しよう」

「円安・ドル高について」

「理想の夕食」

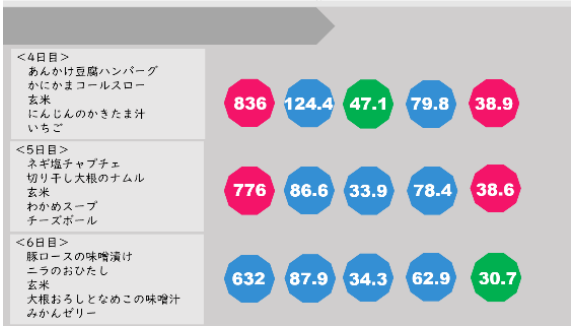
「日本は衰退しているのか」

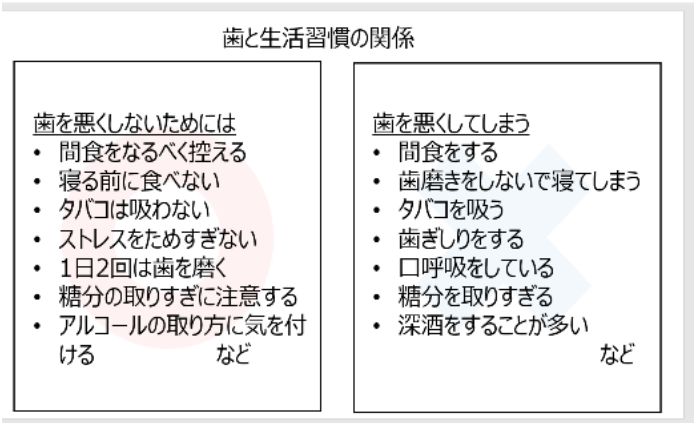
「ＡＩが人間を超える日」

「健康な歯をつくるには」

「色が人に与える影響」

「日本と海外の価値観の違いについて」





Ⅲ　２年次の取り組み

７月に立山調査登山という一大イベントを控えていたこと、また、それを１泊２日の宿泊行事化して、登山以外のレクや野外炊飯などを、生徒の企画によって実施することにして、生徒主導のプロジェクトチームを立ち上げたことにより、１学期は登山に関わる準備の時間にあてた。宿泊に関わるプロジェクトはどれも大成功に終わり、関わったすべての生徒の成長を大いに感じるものとなった。

（プロジェクトチームの概要）

・立ち上げの趣旨、大まかな組織図、役割などを教師から示したが、その後はほぼ生徒によって運営された本格的なチーム（以下ＰＴ）

・全体を総括するＰＴリーダーの下に、「登山」「イベント①・②・③」「野外炊飯」の５グループを設定して、チームを分かりやすく組織化した。

・本番までに数回のミーティングを設けて、そこまでの進捗状況の報告や、次回までに行うこと、他グループへの質問などを綿密に行った。

・できる限り教師は前に出ず、生徒への説明もＰＴが行うようにして、全生徒が行事に前向きに参加できるようにした。

２学期当初は、本校と立山町との連携協定にもとづき、町長や大学教授の講演が行われたが、地域の現状や地域のブランディングに関する講演は、その後の個人探究を進める上で大いに役立つものであった。

２年次の個人探究は**「未来の自分はどのような社会課題を解決できるか」**というテーマに統一し、

１）自分の進路選択と、興味がある社会課題との両方を考えること
２）まとめが完成した時、それがそのまま「志望理由書」になること

この２点をねらって、探究を進めることにした。

（実践事例）

9/21　立山町長の講演　・・・・・・・・・・・・舟橋町長による立山町のいまに関する講演

10/12　２学年進路見学会・・・・・・・・・・・・４コースに分かれ金沢方面の大学等を見学

10/19　千葉工大赤澤先生の講演・・・・・・・・地域とブランディングに関する講演

11/ 2　個人探究ガイダンス・・・・・・・・・・今年度の個人探究の方向性やゴール

12/ 4　志望動機の書き方講座・・・・・・・・・ゴールを見越して講座を開設

2/22　立山町からレクチャー・・・・・・・・・立山町総合計画の説明を受ける

↓

ここから、自分が将来どのような社会課題をどのように解決できるか探究してきた内容を、立山町に置き換えてみた場合、どの課題に該当するか、そしてそれをどう解決できそうか考察する活動に転換した。

当初は、３年次の志望理由書を念頭に、文章でまとめて終了する計画であったが、立山町からの要望があり、最終的に同様のテーマを設定した生徒でグループを作り、さらに議論を深めた上で、全体発表会を開催することにした。当日は、町長、立山町議会の議員、報道、ほか多くの聴衆がつめかける中、町への提言という形式でさまざまな発表が行われた。また、その様子が町の公式 YouTube でアップされた。

２年次の春休みに小論文の課題に取り組んだ。内容は地域の課題解決に関する内容であり、探究で取り組んだことがそのまま題材になるよう工夫したものである。進級後に提出、５月には個々に返却した。

＜未来の自分はどのような社会課題を解決できるか　テーマ抜粋＞

「立山町の魅力向上　～地域コミュニティ」

「心身や学習等の支援を要する児童生徒への対応」

「廃校等の地域支援活用事業」

「子育て支援と子育て家族の支援」

「雄山高等学校の魅力向上策」

「稼ぐ地域づくりプロジェクト」

「富山地方鉄道の利用者数アップのために」

「観光の発展と特産物」

「子育て世代の美容」

Ⅳ　３年次の取り組み

これまでの立山町との連携事業を通じて、商工観光課や総務課の方々と知り合い、意見交換をする機会が増えた。そこでは、町が雄山高校や高校生に期待する点がいろいろと見えてきた。そして、町にとっても高校生にとってもメリットがある win-win の事業が、いくつかありそうなことが分かってきた。こうして２年次の終わりには、次年度に取り組めそうないくつかのアイディアをもって春を迎えた。

３年次の探究の時間は、一般に面談や学習指導など進路指導を行いがちであるが、本校は進路先が多様で、クラス全体で単一の内容を進めにくい実態がある。それならば、２年間取り組んできた探究活動の集大成として、夏に開催される立山まつりの企画・運営に携わる活動に関わって、実際に地域を見て地域に貢献する体験をしてみようということで、こちらから商工観光課に提案してみることにした。すると、こちらの想像以上に大歓迎の返答があり、お互い、夏の本番に向けて何でもやってみようと勢いよくスタートした。

（実践事例）

5/ 9　立山まつりプロジェクト Vol.1 ・・・・・・・・プロジェクトの概要説明
5/30　　〃　　Vol.3 ・・・・・・・・商工観光課の方が来校（以後、毎時）
7/27　立山まつり当日　　・・・・・・・・約７０名の生徒が参加

（実践を通じて）

・こちらも町も初めての試みであり、多くの面で混乱が見られたが、その都度アイディアを出し合って決めていく場面が見られ、新たな事業を創造する苦しみと喜びを経験できた。
・町が高校生の意見や希望をほぼ叶えてくれた。そのため、生徒も責任感が芽生えて、最後までやり遂げることができた。
・「地域」という言葉は、分かったようで実態が見えにくいものであるが、この経験を通じて自分の言葉でそれを語る生徒が増えたと感じる。

Ⅴ まとめ

３年生の２学期になり、生徒は就職・進学それぞれ進路決定に向けて大切な時期を迎えた。受験に向けた書類には、必ずといってよいほど探究の時間に取り組んだ内容が登場しており、難易度の高い受験校ほど、探究の時間に学んだ内容や考察した内容から、進学後に学びたいことを理論的にまとめる必要性が生じていた。生徒は、それぞれ取り組んだテーマを丁寧に紐解き、自分なりの将来像を描いていたように思う。

改めて、「はじめに」の、３つのポイントを振り返ってみる。

１）「取り組んだ内容が、進路決定の武器になる」

生徒の志願理由書や面接練習における返答の内容からも見て取れる。（p７**＜参考＞**を参照）

２）「３年間の積み重ね」

個人探究の進め方、まとめ方、ともに、２年次、３年次を念頭に進めてきた。自分の将来像と地域社会を結び付ける取り組み、実際に地域に参画する取り組みなど、生徒もその関連性を感じて取り組むことができたと思われる。

３）「担当教員が苦しまない持続可能な仕組み」

生徒が活動の意義や内容をよく理解することが肝要であり、そのためには、いかに簡潔で分かりやすく目指すゴールがイメージできるガイダンスを行うかが重要だと思われる。また、毎回同じ様式のワークシートを用いて、連続した展開を心掛けることにより「見える化」を導入し、生徒の主体的な活動を導くとともに、誰が担当しても同じような授業ができるように工夫した。

また、外部の協力が不可欠であることを痛感した。この３年間には、ライセンスアカデミーの髙橋さん、吉田さん、各大学・短大・専門学校の講師の方々、各企業の担当者の方々、そして、立山町商工観光課、総務課、立山舟橋商工会、ほか、多くの方々に関わってもらって実りある活動ができた。特に、立山町の方々は非常にバイタリティーがあり、生徒に負けないパワーで高校生と向き合って下さり、新しいチャレンジをすることができた。

一方、課題としては、

① 活動内容や成果物等を記録に残す方法が確立していないこと

② 外部、特に立山町とのコーディネートに関して、担当者に委ねられていて継続性に課題

③ 校外に出る活動を企画する場合の授業時間や引率の問題

④ 探究活動の重要性を学校全体で共有する

などが挙げられる。新しい取り組みをするたびに課題が浮き彫りになると思うが、それを解決しながら新たに取り組むことも、探究活動の重要なファクターだと考える。

以　上

＜参考＞

①Ｔ大学経済学部　推薦入試

２年次の個人探究では、立山町の活性化を図る方策を主に観光面から探究した。最終のグループ発表では、後に挙げるＮ大学合格者とともに、地鉄立山線の利用者数向上のために、企業や行政ができることをそれぞれ考えて提案した。推薦入試では、志願理由書「探究活動の実践事例」「入学後にやりたいこと」「卒業後の計画」に、町の活性化と、町職員として活躍できる事例を考えて提出した。面接においても、それをもとに自分の言葉で語ることができた。

②Ｎ大学企業情報学部　総合型選抜

総合型選抜を受験したため事前提出の書類が多く、その内容も多岐に渡った。「志願理由書」や「本学部を志望するにあたり、高校時代に取り組んだ学習」では、２年次の探究をもとに、地域に潜在する魅力を発信する必要性を指摘する内容を盛り込んだ。また、上述のＴ大学合格者同様、鉄道の可能性に言及し、利用者数向上が地域の生き残りに不可欠であると結論づけた。なお、合格後に大学側より論文形式の課題が出され、立山線と県内他路線との比較から見える課題と展望についてまとめて提出した。

③Ｔ県立大学看護学部　推薦入試

１年次の個人探究において、すでに志望校を決めていたため、志望先が導入していたユマニチュードを探究テーマに据えた。全体発表をする生徒を決める事前発表において、他生徒から満票を獲得、全体発表でも講師から好評を得た。２年次は、それを地域医療や難病患者にどう結び付けていくか考察した。こうして、３年生になる頃には志願理由の原型が完成していたと思われる。

④Ｔ県立大学情報工学部　推薦入試

１年次はAIに関して、２年次はシンギュラリティと未来について、それぞれ探究を行った。進路もその方面であり探究が役立ったことは間違いないが、志願理由書には、立山まつりでリーダーを務め、他の人を動かした経験や地域貢献に関する話題でかなりの文字数を割いた。面接でもその話をしたそうで、受験後に判明した点数でも面接は高得点であった。

⑤Ｓ大学栄養科学部　推薦入試

１年次の探究では理想的な朝食のメニューとアスリートの食事制限について、２年次は、全世代が健康で過ごせて体力向上を図る方策について取り上げた。それを立山町に落とし込む際には、栄養指導を導入した食事の提供とジムが融合した施設を提案した。志願理由書、本番の面接、ともにこれらをベースとして、栄養の面で他者に貢献する施策を述べた。